

大安寺西塔跡の発掘調査

- 史跡大安寺旧境内保存整備事業に係る発掘調査 -

調査地 奈良市東九条町 1340 ほか
調査期間 平成 15 年 7 月 1 日 ~ 15 年 10 月 31 日
調査面積 370 m²

1. 調査の概要について

保存整備事業に係る西塔跡地区の調査は平成 13・14 年度に続き今回が 3 度目の調査となります。今回は昨年度の調査区の一部に重なるかたちで、現状土壇の北西側約 4 分の 1 を調査しました。

昨年度の調査では、塔基壇の四方にそれぞれ階段を半分ずつ確認し、基壇上面には礎石の抜き取り痕跡を 6 箇所確認しました。その結果、塔基壇は一辺約 21m の方形で、四方に階段が取り付く大きなものであり、塔本体も初重(1 階部分)の一辺が約 12m(三間)で、奈良時代では東大寺に次ぐ大規模な塔であったことが明らかとなりました。また、基壇の周りには塔から崩れ落ちた瓦が大量に埋まっていますが、その中でも特に瓦が大量に含まれる層が二枚確認され、この塔が二度の火災を受けたのではないかと推定しました。

今年度の調査では、基壇の北西約 4 分の 1 全てにおいて「延石(のべいし)」を検出し、塔基壇本体の規模については昨年の成果を追認することができました。延石以外の基壇外装の石は 12 世紀頃にほとんど抜き取られたようですが、基壇の北西角で「地覆石(じふくいし)」を検出しており、より正確なデータを得ることができました。また、一部ですが延石の上に地覆石が据わり、さらにその上に板壁状に立つ「羽目石(はめいし)」が残っている部分があり、「束石(つかいし)」という柱状の石をはめ込む跡が残る地覆石も認められることから、この基壇が「壇上積基壇(だんじょうづみきだん)」と呼ばれる最も丁寧な工法で造られていたことがわかりました。

塔本体についても昨年度の成果から想定された柱の位置に、礎石が抜き取られた跡をさらに 5 つ確認しました。

基壇周囲の堆積についても、基本的には昨年度認められた二枚の瓦堆積層が一様に基壇の全周に堆積しているであろうことがわかってきました。ただし、前回 2 度の火災を想定しましたが、前回同様、今回も下部の瓦堆積層には火災の確たる証拠はなく、一度目の瓦の崩落(下部の瓦堆積)は火災以外の原因も考えられる可能性が出てきました。

2. 出土遺物について

出土した遺物は総数 2,000 箱を超えます。そのほとんどは瓦類です。現在未整理のため詳細は不明ですが、瓦の種類はほとんどが昨年度出土のものと同じものです。出土遺物のうち銅製品が大小含めて約 40 点出土していますが、ほとんどが破片で、どの部分に用いられたかは不明です。しかし、このうち風鐸(ふうたく)と水煙(すいえん)は昨年度の調査においても出土していますが、今回の出土品によって新たな事実がわかりました。

風鐸（塔など瓦葺の建物の軒先に吊るされる大きな風鈴のような飾り具）

今回出土した風鐸は、高さ約 32 cm、最大幅 15.5 cm、重さ（現状）5.4 kg の金銅製です。横断面形（輪切りにした時の面）はレンズ状に近い菱形であり、内部には舌（ぜつ）が残っています。

昨年度出土のものより若干背が高いですが、重さは 3 kg 以上軽くなっています。これは銅の肉厚がやや薄い（7 mm～9 mm）ためです。また断面形も昨年度のものとはほぼ円形であったのに対し、本品は明らかな稜をもつ菱形となっています。すなわち、両者はまったく異なる鑄型（いがた）から作られたもので、この塔には少なくとも 2 種類以上の違った形の風鐸が吊るされていたことが明らかとなりました。これらは、異なる部位に吊り下げられていた可能性が高いですが、実際にどう区別されていたのかは不明です。なお、今回は昨年風鐸と共に出土した風招（ふうしょう）は出土しませんでした。

水煙（塔のてっぺんある火炎のような飾り具）

水煙は高さ 50 cm、最大幅 34 cm、厚さ 2 cm、重さ 15.5 kg の金銅製です。上下端とも折れており、水煙本体の一部です。出土品の全体的な形状は、幅約 8 cm の板状の部分に、炎が燃え立つような意匠が付いたものとなっています。欠損部がありますが、おそらく上に向かって尖るように延びていくものと思われます。昨年度出土した水煙と思われる銅製品が今回のものと接合するようであり、これで全高 80 cm 分が発見されたこととなります。

本品は他で見られる水煙と異なり、表現が幅広かつ平面的で、シンプルな感じを受けます。しかし、そのぶん重厚で力強いイメージを与えるもので、よそでは見られない特徴をもったものであると言えます。また昨年度のものに合わせて改めて見ると、その意匠は極めて独特のものであり、大安寺が当時の寺院のなかでも特殊な存在であったことを窺わせる重要な資料です。

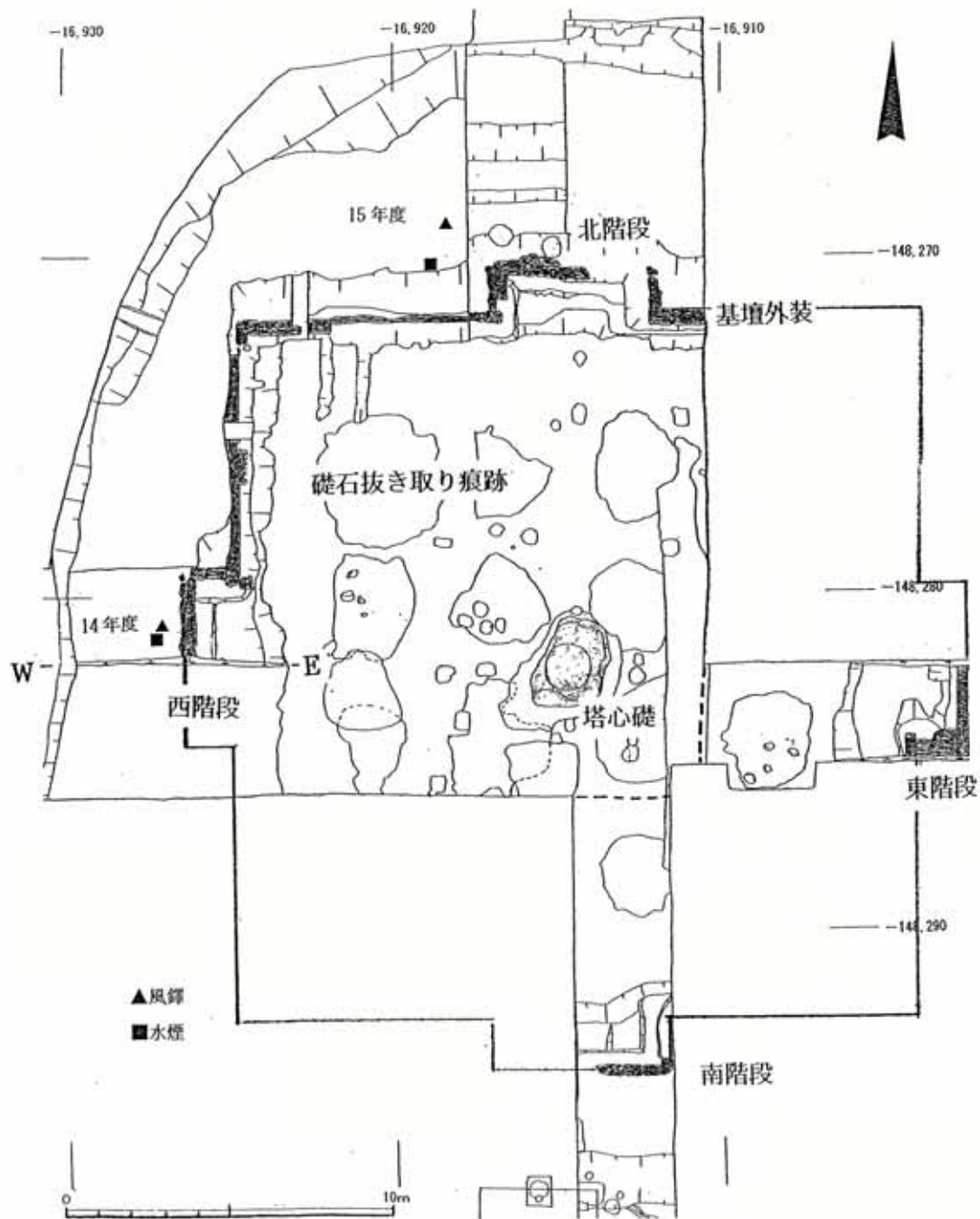
3. まとめ

本年度の調査では、昨年度想定された塔基壇の規模を広い範囲で確認することができました。また基壇化粧に用いられていた石がほとんど持ち去られていることが判明しましたが、「延石」は全周に残存している可能性が強くなりました。基壇外周に堆積する二枚の瓦堆積層についても、ほぼ全周に同様な状態で堆積している可能性が高くなりました。

また、今回の調査においても大量の瓦が出土していますが、瓦の年代から言えば、西塔が建てられたのは奈良時代の終りから平安時代であろうという前回の推定は変わることはなく、やはり西塔の建てられたのは大安寺の他の建物よりもかなり遅れたものと考えられます。

新たな出土遺物である風鐸と水煙は、前回出土のものとは異なる新たな知見を与えてくれるものでした。両者とも当時の寺院の荘厳具（そうごんぐ）を知るうえで重要な遺物であり、塔の建立に伴って製作されたものが今日に残る例としては、極めて希少で資料的価値の高いものです。水煙は出土品としては伊丹廃寺（いたみはいじ）の出土品に次ぐ残存状態が良好なもので、発掘調査によって明確に出土位置の判るものとしては最も良好な例でしょう。

このような銅製品は、基壇外周の堆積土層の状況から考えると、未調査の部分にも存在している可能性が高いと思われます。今後の調査によっては、塔基壇や他の遺構の成果と共にさらに重要な遺物の発見も期待されます。



西塔遺構平面図 (S = 1/150)

風鐸（ふうたく）



水煙（すいえん）

